大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

北相公本業平集の資料となった伊勢物語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005184

北相公本業平集の資料となった伊勢物語

青木　賜鶴子

（一）

『伊勢物語』は、一時に成立した作品ではなく、不断の成長増益を繰り返して現存の形態に至ったものであろう、という考え方は、現在、大半の研究者が認めるところである。しかし、その成長の過程については、さまざまな方法によって、さまざまな仮説が立てられている。

いわゆる伊勢物語三段階成長論は、片桐洋一先生によって提唱されたものであるが、それは、

①古今集所収の業平歌のうち、他に比してあまりにも長大な詞書を持つ和歌は、最も原初形態の伊勢物語から採録されたのではないか、

②在中将集と、書陵部蔵御所本業平集中の雅平本は、勅撰集や伊勢物語などから業平関係の和歌を撰び出したものであるが、伊勢物語から採録された和歌が全体の半数にも満たないのは、二集が編纂された頃の伊勢物語が、現存のものよりもかなり小規模だったからではないか、

という考え方に立って、伊勢物語の成立段階を便宜上三次に分け、古今集成立以前に既に存在し、その撰集資料にもなったものを第一次、古今集以降、在中将集・雅平本業平集編纂の頃までに成立したものを第二次、それ以降のものを第三次、と比定したものである。《注1》

さて、本稿で問題にしたいのは、書陵部蔵御所本業平集の末尾に「他本」として付加されている北相公本である。これは、北相公本によって、雅平本とそれに続く三条三位入道本にない和歌のみを補ったものであるから、北相公本の全容を確実に把握するの

は難しいが、「他本」の部分の前半十八首が、ほぼ在中将集の配列の順に並んでおり、在中将集にあって「他本」の部分にない和歌でも、既に存在する雅平本や三条三位入道本に左合点が付されている場合が多いことから、在中将集と相似た形態のものであろうと推測されている。《注2》

しかし、続く十三首は、例外一首を除いて《注3》、在中将集をはじめ、他のどの業平集にも見えないものである。その出典を表にすると次のようになる。

北相公本《注4》番号・初句	出典		
	伊勢	三代集	その他
19いはねふみ	七四	拾九六九坂上郎女	万葉2422
20かゝらでも		拾七二八業平	
21あさごほり		拾七二九能宣	
22しなのなる	八		
23こひわびぬ	五七		
24おもへども	八五	※①	六帖31600
25よるべなみ		古六一九不知※②	
26しらゆきの		古九〇二棟梁※③	
27いへばえに	三四		※④
28おきなさび	一一四	後一〇七六行平※⑤	六帖32256行平 34153在中納言
29てる月を		後一〇八一 河原左大臣	六帖33233 河原左大臣
30かぎりなき		後一〇八二行平※⑥	
31わするなよ	一一	拾四七〇橘忠基	

※①類従本44・在中将集68・雅平本（51）と重出する。
※②前歌業平。元永本・唐紙巻子本・寛親本は業平。
※③前歌業平。曼殊院本は業平。　※④類歌、六帖32950
※⑤掘河本は業平。　※⑥掘河本・承保三年奥書本は業平。

（一一）

さて、右の表から、

①20 21 25 26の四首と29 30の贈答、あわせて六首は、勅撰集から採録された

ことがわかる。20は拾遺集七二八の業平歌なので問題はないが、

それ以外は、いずれも業平とは無関係の和歌である。しかし、21（拾遺七二九）・25（古今六一九）・26（古今九〇二）は、出典の勅撰集ですぐ前に業平歌が位置しており、25は古今集元永本・唐紙巻子本・寛親本、26は古今集曼殊院本に作者名がなく、前歌に続いて業平作ということになる。また、29 30（後撰一〇八一・一〇八二）は、掘河本・承保三年奥書本には河原左大臣と業平との贈答とされている（ただし、作者名の横に「行イ」という異本書入がある）。おそらく、北相公本が資料に用いた勅撰集にも業平作とあり、それをそのまま採録したのであろうと考えられる。

また、

②勅撰集と伊勢物語に重出している和歌は19 28 31の三首である。このうち、北相公本28の和歌、

仁和のみかどのせりがはの行幸に、たもとにつるのかたをえりてかきつく

おきなさびひとなとがめそかりごろもけふばかりとぞかりもなくなる

は、伊勢物語一一四段と、後撰集雑一、一〇七六に重出する。後撰集の普通の形は、

仁和のみかど、嵯峨の御時の例にて、せり河に御幸したまひける日　在原行平朝臣

嵯峨の山みゆきたえにしせり河の千世のふるみちあとは有りけり　（一〇七五）

おなじ日、たかがひにて、かりぎぬのたもとにつるのかたをぬひてかきつけたりける

おきなさび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞたづもなくなる　（一〇七六）

行幸の又の日なん致仕の表たてまつりける。

であるが、掘河本は「おきなさび」の歌の作者を「在原業平朝臣（イ無）」とし、雲州本はこの二首の順序を逆にして、「おきなさび」の歌の詞書を、

仁和の帝、せりがはに行幸し給けるひ、たかゞひにてかりぎぬのたもとにつるのかたをすりてかきつけて侍ける

とする（傍線部分は天福本にも朱筆による異本書入れがある）。伊勢物語伝本の大半は「つるのかたを」云々の記述を持たないので、雲州本のような詞書を持ち、既に作者を業平としている後撰集伝本から採録したとも考えられるが、伊勢物語伝本のうちでも

塗館本には「つるのかたをつくりてかきつけゝる」という記述が見えるので、伊勢物語から採録した可能性も全く否定することはできない。また、和歌の第五句「かりもなくなる」は、後撰集・伊勢物語の大半の伝本に「たづもなくなる」とあるが、伊勢物語皇太后宮越後本は「かりもなくなる」とする。したがって、「つるのかたを」云々の記述を持ち、かつ「かりもなくなる」とする伝本も存在し、北相公本はそのような形の伝本から採録した可能性があると思う。もしそうだとすると、北相公本が資料に用いた伝本は、後撰集にせよ、伊勢物語にせよ、現存本のいずれとも全く一致はしないものの、存在したと考えることも可能な一伝本であったということになる。

○

後撰集掘河本がこの和歌を業平作とするのは、伊勢物語一一四段の影響であろう。この段は、後撰集にある行平の和歌を利用して物語化したものと考えられるが、逆にその伊勢物語の影響によって、業平作とする後撰集伝本が生まれたと思うのである。

また、北相公本2930に採られた、後撰集雑一、一〇八一・一〇八二の、河原左大臣源融と行平との贈答も、掘河本・承保三年奥書本では河原左大臣と業平との贈答とされていることは既に述べた。その2930の贈答は、

月あかき夜、かはらの左大臣のいへにまかりて、かへりなむと思へるけしきをみてのたまふ

てる月をまさのきのつなによりつけてあかでわかるゝひとをつながむ

かへし

かぎりなきおもひのつなのなくはこそまさきのかつらよりもなやまめ

というものである。後撰集にも、

家に行平朝臣まうできたりけるに、月のおもしろかりけるにさけらなどたうべて、まかりたたむとしけるほどに

（一〇八一詞書）《注5》

とある。月夜に融邸で宴があり、退出する頃になっても別れかねている、というのである。後撰集掘河本・承保三年奥書本がこれを業平との贈答とするのも、伊勢物語の影響ではないだろうか。

伊勢物語八一段に、左大臣源融が、賀茂河のほとり、六条わたりの自邸に親王たちを招いて宴を催し、人々がその屋敷の素晴ら

しさをほめる和歌を詠んだ時、最後に主人公の翁も「しほがまにいつか来にけむ……」の歌を詠んだという話がある。この段は、融と業平とのつながりを想起させるに十分である。このような八一段の世界を背景に、右の贈答を融と業平との贈答として読む後撰集の享受が生まれたと思われる。あるいは、右の贈答を取り込んだ伊勢物語伝本が存在したとしても不思議ではないと思う。したがって、北相公本は、既に作者を業平としている後撰集伝本から採録したとも考えられるし、この贈答を含みこんだ形の、今はない伊勢物語の異本から採録したとも考えられるのである。

このように、北相公本が勅撰集から採録したと考えられる和歌は20 21 25 26 28 29 30の七首であるが、業平の真作は20一首だけで、それ以外は業平とは無関係の和歌である。しかし、それは北相公本が資料に用いた勅撰集の誤りに従っただけであると考えられる。そして、このうち28 29 30の三首は、今は存在していない伊勢物語の異本から採録した可能性も全くないわけではない、と思うのである。

○

ところで、北相公本のそのような作業は、いつ行なわれたのだろうか。

現存する業平集はすべて、古今集・後撰集・伊勢物語・大和物語などから業平関係の和歌を集めたものである。在中将集と深い関わりのある北相公本も同様であっただろう。しかし、一度編集された後に、そこに漏れている勅撰集の業平歌を増補する、という作業も、当然行なわれ得ると思う。それは私家集に一般的に見られる編集方針だからである。

たとえば、内閣文庫本躬恒集（『私家集大成1』躬恒Ⅱ）の末尾には、「乍入選集漏家集」として古今集～新続古今集の躬恒歌が増補されているし、『続国歌大観』に収められた忠岑集・仲文集・是則集などの末尾にも、同様の増補が見られる。また、流布本系小町集の場合は、そのような〈断わり書き〉をしないで増補するものである。同集は、片桐洋一先生によれば《注6》、古今集・後撰集の小町関係の和歌を中心とする第一部、小町作とも否とも判定しがたい和歌中心の第二部、小町作でないこと明らかな和歌を載せる第三部、「他本」によって補った第四部、「又、他本」による第五部、という五部構成をとるが、その第二部と第五部の末尾部分に、古今集・後撰集の小町歌が増補されている。勅

撰集にまだ小町の歌があるのに気ついて補ったのである。したがって、北相公本も、一度形をなした後に、勅撰集から増補された可能性があると考えられる。

○

さて、勅撰集と伊勢物語に重出している和歌のうち、残る1931の場合はどうだろうか。19の和歌、

いといたううらめしき人に
いはねふみかさなる山はへだてねどあはぬ日おほくこひわたるかな

は、万葉集巻十一、二四二二に、

石根踏　重成山（イハネフミ カサナルヤマハ）　雖不有（アレネドモ）　不相日数（アハヌヒヤマタ）　恋度鴨（コヒワタルカモ）（作者不明）

とあり、拾遺集恋五、九六九にも「題しらず　坂上郎女」として載せられているが《注7》、北相公本の詞書は、伊勢物語七四段、

むかし、をとこ、女をいたううらみて、
いはねふみかさなる山にあらねどもあはぬ日おほくこひわたる哉《注8》

から採録したことを示している。万葉集や拾遺集の別人の和歌をわざわざ業平集に採るはずはないから、当然のことであろう。

また、31の和歌、

身のうれへ侍て、あづまのかたへまかりて、ともだちのもとへいひをくり侍
わするなよほどはくもゐになりぬともそらゆく月のめぐりあふまで

の場合も、拾遺集雑上、四七〇（拾遺抄雑下、五二八）と伊勢物語一一段に重出するが、拾遺集や拾遺抄には「たちばなのただもと」が「人のむすめ」（拾遺抄「人のめ」）に贈った歌となっており、これも伊勢物語からの採録たることは明らかである。

また、

③22 23 27は、現存文献による限り、伊勢物語だけに採られている和歌

であり、伊勢物語八段・五七段・三四段に見えるものである。

つまり、北相公本は、他の業平集と共通する章段以外に、八・一一・三四・五七・七四の五章段、もしくは前述した一一四段を含めて六章段から採録しているのであるが、北相公本がこれらを採録した理由は何だろうか。右の章段の性格を分析しつつ考えてみたい。

（二二）

冒頭で述べた、片桐洋一先生の伊勢物語の成長についての御説によれば、古今集以前に既に存在していたと考えられる章段の前後に類従本業平集に採られている章段が位置し、さらにその前後に、在中将集・雅平本に採られている章段が位置している、というように、古今集以前の第一次伊勢物語を中核として、前後に章段が増益されてゆく過程は明らかである。主人公の東下りをテーマとする七段～一五段を例にとれば、第一次成立の九段（「八橋」の場面と「隅田河」の場面とに分かれていた）を中核として、在中将集・雅平本に採られている九段の「富士」の場面や、「武蔵国」の一〇段が増益され、さらにその前後に第三次成立章段が増益されていったと考えられるのである。

ところで、北相公本は、七段～一五段のうち、在中将集にも採られている九・一〇段の和歌のほかに、八段と一一段だけを採録している。これは偶然ではないように私には思われる。この二章段は、前後の章段より早い時期に成立したと考えられるからである。

八段は、

むかし、をとこ有りけり。京やすみうかりけん、あづまの方にゆきてすみ所もとむとて、ともとする人ひとりふたりしてゆきけり。

と書き出されるが、それは九段の、

むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、「京にはあらじ。あづまの方にすむべきくにもとめに」とて、ゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。

と対応している。主人公の東下りについて、その原因（イ）、目的（ロ）、誰と行ったのか（ハ）を説明するのである。しかし、七段では、

むかし、をとこありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、

と、原因のみが記されるにすぎない。七段は、既に存在していた八・九段の設定を前提にしているからこそ、このような簡略な説明だけで事足りたのではないだろうか。

また、七段の和歌、

いとゞしくすぎゆくかたのこひしきにうらやましくもかへるなみかな

は、後撰集羇旅、一三五二に、

あづまへまかりけるに、すぎぬる方こひしくおぼえけるほどに、河をわたりけるになみのたちけるを見て

という詞書のもとに載せられた業平の和歌であるが、七段では、「伊勢・尾張のあはひの海づらをゆく」時の作と設定している。なぜ「伊勢・尾張」と限定するのだろうか。和歌を読む限り、そして、後撰集の詞書を読む限り、「あづま」へ行く途中ならどこに設定してもよいし、いっそ「あづま」に着いてしまってからの作としても不自然ではないと思う。にもかかわらず「伊勢・尾張」と限定しているのは、次の八段の「信濃国浅間嶽」という場面設定の影響ではないだろうか。つまり、京から「あづま」へと下ってゆく主人公を物語るのに、八段よりも東の場所には当然設定できないし、また、後撰集詞書の「あづまへまかりけるに」というような漠然とした書き方、「あづま」に着いてしまったとも受けとれる書き方でも困ったからだと思うのである。

したがって、七段は、九・十段の次に八段が成立した後の段階でこの物語に取り込まれ、北相公本は、七段がまだ成立していない頃の伊勢物語を資料にした、と考えられる。

次に、一一段は、

昔、をとこ、あづまへゆきけるに、友だちどもに、みちより、いひおこせける。

わするなよほどは雲ゐになりぬともそらゆく月のめぐりあふまで

という段である。主人公が「あづま」に下ったことは周知の事実として、その「道より」「友だちども」に和歌をよこした、というのである。

その前に位置する第二次成立の一〇段は、「武蔵国」まで「まどひ歩」いた主人公がその国の女と契る話であるが、これは九段の最後の場面、「武蔵国と下総国との中」にある隅田河の場面に因むものであろう。そして、一一段をはさんで一二段は、主人公が「人のむすめ」を盗んで「武蔵野」まで連れてゆく話、一三段も「武蔵なる男」と京の女との話である。このように同じ武蔵国の話でありながら、一二・一三段が一〇段のすぐ次に位置していないのは何故だろう。また、続く一四・一五段は、主人公がさら

に「みちのく」まで出かける話である。「あづま」へ行く途中で和歌を詠んだというのなら、その一一段は、武蔵国関係章段の前か後、つまり一〇段の前か一三段の後に位置していてもよいのではないか。

この現象は、一一段の成立が一二・一三段の成立よりも古いことを物語っているように思う。惟喬親王との主従の愛を描く八二・八三段、長岡の母との親子の愛を描く八四段などの第一次成立章段の次に、再び惟喬親王との交流をテーマにする第二次成立の八五段が位置しているように、九段に続いて一〇段が成立し、その後、一二・一三段が成立した時には既に一一段が存在していたために、このような配列になったと思うのである。つまり、北相公本は、まだ一二・一三段が成立していない頃の伊勢物語を資料にした、ということになる。

このように、北相公本が新たに採録している八段・一一段は、現存本の章段配列や内容から見て、前後の章段よりも早い時期に成立したと考えられるのである。

○

次に、伊勢物語からの採録かもしれないと考えた一一四段を取り上げたい。このあたり、一〇八段～一二四段の和歌はすべて、在中将集にも雅平本にも採録されておらず、いわゆる第三次成立章段と考えられるが、このうち一一二段から一二四段までの成立については、片桐洋一先生が、

一一四段から一一九段までは、阿波国文庫本・谷森本・神宮文庫本・大島本などにはない。また泉州本でも一一七段の次からの段序が甚だしく乱れている。ここであえて推定を試みれば、先の「死」「短き命」をテーマにした一〇五・一〇九・一一〇・一一一に続くのは臨終辞世の歌の一二五段ではなかったのか、本来ならば最末尾に付加するものが、先に述べたように臨終の段の後では落ちつかぬゆえに、一一二段～一二四段をまとめてその前に付加したのではないかと考えられてくるのである。《注9》

と述べておられるように、現存本の状況や章段のテーマから考えて、後の付加である可能性が大きい。

その中で、一一四段だけが特に古いと即断することはできないが、しかし次の点は注意してよいのではないか。

それは大島本の配列である。大島本は、一一五段～一一七段を

持たず、一一八・一一九段には「或本有之」と注記するが、一一四段は、一二四段と一二五段との間に置いている。一二四段は、

むかし、をとこ、いかなりける事を思ひけるをりにか、よめる。

おもふことといはでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなければ

という段である。思っていることはそのまま口に出さずにやめてしまう（死んでしまう）方がよい、自分と同じように心が通じる人などいないのだから、というこの和歌は、やはり臨終の一二五段の直前に置かれるのがふさわしい。それなのに、大島本がこの段と一二五段との間に一一四段をはさむのは、一一四段の方が先に付加されたからではないだろうか。片桐先生の言われるように「臨終の段の後では落ちつかぬゆえ」に、一二五段の前に一一四段、さらにその前に一二四段、という具合に付加されていったのではないか。もしそうであれば、一一四段はやはり古い時期に成立した、ということになり、また、大島本は、現存本のような配列に整えられる以前の伊勢物語の形態を留めている、ということになる。

さて、北相公本が新たに採録している章段のうち、残る三四・五七・七四の三章段は、これまで述べてきた章段とは違って、第二次までに成立していた章段群と遊離して存在しており、現存本の配列と関連させて成立時期の古さを窺うことはできない。

しかし、「つれなかりける人のもとに」（三四段）、「つれなき人のもとに」（五七段）、「女をいたううらみて」（七四段）というように、この三章段のテーマは、いずれもつれない女に対する恋の嘆きであり、女につれなくされながらもなお一途にその女を思い続ける主人公の姿を描いている点で共通している。

第一次伊勢物語の主人公が、二条后や斎宮などの恋してはならない人に対しても、みずからの烈しい情熱のために一途に突き進んでゆくタイプの人物として描かれ、第二次伊勢物語でも、恋死をするまでに女を愛する（四〇段）など、その業平像が受け継がれているが、第三次伊勢物語になると、「つくも髪」の老女にまで「けじめ見せぬ心」を見せる（六三段）というように、色好み業平、プレーボーイ業平として描かれるものが多いことは、既に片桐先生が御指摘のところである。《注10》

そのような観点からこの三章段を見るとき、これらに共通する一途な主人公の姿は、第二次までの伊勢物語の業平像と通じるものがあると思う。思っても思っても、女はつれない。しかし、なおあきらめずにその愛を奪こうとする主人公の姿は、少なくとも〈色好み業平〉に変貌してしまう以前のものだと思うのである。

このように見てくれば、この三章段のテーマが共通しているのも、偶然ではないように私には思われる。これらの章段は、ある時期、まとめてどこかに加えられたのではないだろうか。そして現存本に至る過程で、同一テーマであることを気にして分散されたと考えてはどうか。東下り章段のように大きな一つのテーマで結ばれている章段群は、伝流の過程で分散されることもなかったが、この三章段の場合は、逆にテーマがあまりにも似すぎていたために、現存本に至る過程において分散して配置された、という可能性も考えてよいのではないだろうか。

以上述べてきたように、北相公本に新たに採録された章段は、いわゆる第三次成立章段のうちでも、比較的古い時期に成立したものであると考えられる。そして、それはそのまま、ある時期の伊勢物語の形態であったと思うのである。

〈四〉

以上、北相公本が、いわゆる第三次成立章段のうちの一部の章段しか採録していないことに注目し、それは北相公本が資料にした伊勢物語の形態を反映しているのではないか、という推論を試みた。これとは違って、北相公本の編纂者が何らかの基準で〈選んで採った〉とする考え方も、一方では成り立ち得るだろう。しかし、〈選んで採った〉とすれば、いったいどのような基準で選び採られたのか、私にはわからないのである。

ここで注意すべきは、これらの章段の和歌が、いずれも業平作であることを確かめられない、むしろ別人の作か、何らかの伝承歌であると思われる事実である。

八段は、主人公が東下りの途中で「信濃国浅間嶽」を望んで和歌を詠むものであるが、九段のごとく「三河国八橋」や「富士」を経て「あづま」に向かう東海道からは「浅間嶽」は見えない。東海道を下る、いわば〈正伝〉のほかに、信濃国を経て東に下る〈異伝〉もあったというポーズで、この物語に取り込まれたのであろうか。さて、八段の和歌、

しなのなるあさまのたけにたつ煙をちこち人の見やはとがめぬ

は、現存文献による限り伊勢物語だけに見えるものであるが、浅間嶽の煙にみずからの（この場合おそらく恋の）思いを託すことは、拾遺集恋一、六五六、

いつとてかわがこひやまむちはやぶるあさまのたけのけぶりたゆとも　（題しらず　よみ人しらず）

に見られるように、当時の一般的なとらえ方の一つであった。折口信夫博士が「業平と思えば不合理だが、信州の民謡ととればよい。《注11》」と述べられたように、八段の和歌は、本来伝承歌であったのかもしれない。たとえそうでなくとも、東下りの〈正伝〉から外れるものであることは否めないだろう。

次に、一一段の「わするなよ」の歌は、拾遺集雑上、四七〇に、

たちばなのただもとが人のむすめにしのびて物いひ侍りけるころ、とほき所にまかり侍りとて、この女のもとにいひつかはしける

という詞書のもとに、橘忠基の作として収められているが、和歌の作者を作者名表記として書かず、詞書の主語として提示する拾遺集の形は、その歌語り的性格を物語っている。さらに、『古来風体抄』が、この歌の作者を大江為基としていることから見て、「ただもと」を「ためもと」と誤写した可能性と同時に、作者を為基とする別の伝承が存在した可能性を考えることができる。

七四段の「いはねふみ」の歌も、既に述べたように、もとは万葉集の作者不明歌であるが、拾遺集に坂上郎女の作として収められている。和歌が既に有名になっていて、それを坂上郎女の作とする伝承もあったのだろう。そして、伊勢物語はその伝承歌を利用したと考えられる。

次に、三四段の和歌、

いへばえにいはねばむねにさわがれて心ひとつになげくころ哉

は、類歌とおぼしいものが古今六帖に見える。

いへばえにいはねばくるしよのなかをなげきてのみもつくすべきかな　（三二九五〇・作者名無）

偶然似たといえばそれまでだが、もし両者に関係ありとすれば、どちらか一方が他方を改変した可能性も勿論あるが、本来は同じ一つの和歌であったものが、伝承されていくうちにさまざまな異

文を生み出したと考えることもできる。

また、五七段の和歌、

こひわびぬあまのかるもにやどるてふ我から身をもくだきつる哉

は、現存の資料では伊勢物語以外に出典はないが、新勅撰集恋二、七二〇に「題しらず　よみ人しらず」として収められている。新古今集や新勅撰集をはじめとする鎌倉時代以降の勅撰集では、伊勢物語の和歌は、業平作でないことが確認される場合を除いては、原則的に業平の和歌として入集させているのだが、この和歌が業平作とされていないのは何故だろう。撰者定家は、しかるべき根拠を持っていたのではなかろうか。つまり、業平作でないことを示す何らかの資料が存在した可能性が考えられるのである。

さらに、伊勢物語からの採録かもしれないと考えた一一四段の「おきなさび」の歌も、後撰集に行平作として収められたものであることは既に述べた。

○

このように、北相公本に新たに採録された章段は、いずれも、業平以外の人物の作か、伝承歌とおぼしい和歌を利用した章段なのである。もし、北相公本の編纂者が、現存本のような形態の伊勢物語を資料に用い、その中からいくつかの章段を〈選んで採った〉のならば、なぜこのような章段ばかりを選び採ったのだろうか。特に、一一・七四・一一四の三章段は、勅撰集を見れば他人の作とすぐにわかる和歌を用いている。家集を編纂しようとするほどの人物が、当時必須の教養とされていたであろう勅撰集の知識を全く持っていなかったとは思えない。となれば、北相公本の編纂者は、これらの和歌を〈選んで採った〉のではなく、伊勢物語に含まれる和歌のすべてを、業平の歌と見なして、あるいは業平の歌とする伝承を容認する姿勢で採録したのだが、資料として用いた伊勢物語の形態が現存本より小さいものであったために、このような結果になったと考えるのが最も自然であろう。

すなわち、北相公本の資料となった伊勢物語は、いわゆる第二次伊勢物語以降、さらに成長をとげた、ある段階の伊勢物語であったということなのである。伊勢物語の成長過程を、便宜上、三段階成立という形で説明なさっている片桐先生も、たとえば同じ第二次成立の章段の中でも、類従本に採られている章段の方が在中将集や雅平本に採られている章段よりも古い成立であろう、と

述べておられるように、正確には不断の成長を続けていたと考えるべきであることを断っておられるが、以上述べてきたことによって、それを改めて確認することができたわけである。

（五）

ところで、現存の伊勢物語には、確認できる範囲に限っても、万葉集や古今集・後撰集などに見える別人の、あるいはよみ人しらずの和歌を利用して一段に仕立てた章段が数多く含まれていることは周知の事実である。いわゆる第三次成立章段にはそれが多い。このような章段は、第一次の、古今集の編纂資料にもなったような、業平真作の和歌だけで構成されていた、まさしく業平の物語と呼ぶにふさわしい物語世界と、その物語世界を受け継ぎ、業平がみずから語っているかのごとき姿勢を随所に見せながら、第一次伊勢物語の世界をさらに拡げた第二次伊勢物語の世界とを前提にしてはじめて、伊勢物語に取り込まれ得たのであろう。

その契機となったものは、北相公本が編纂された頃の伊勢物語ではなかったか。東下りの〈正伝〉からは外れるにもかかわらず「浅間嶽」を望む和歌を取り込み（八段）、橘忠基の作とも大江為基の作とも伝える伝承歌（一一段）や、坂上郎女の作とする伝承もあった万葉歌の異伝（七四段）を取り込み、そして、もし一四段も増補されていたとすると、兄の行平の和歌さえも業平の事跡として取り込む、というように、業平作とは思えない和歌を意図的に用いて章段化する。それは、はなはだ強引な、思い切った増補の方法ではあったが、以後の伊勢物語の成長をさらに自由、かつ多彩なものにしたと考えられる。その意味で、北相公本が編纂された頃の伊勢物語のあり方は、伊勢物語成長史において、まさしく大きな転換期であったと言えよう。

○

伊勢物語の成長を支えてきたものは何か。それは一言で言えば、素晴らしい伊勢物語の世界に、そしてその主人公業平に憧れ、その世界を少しでも拡げたい、という数多くの人々の熱意であると私は思う。

業平集が、業平作らしい和歌を少しでも多く集めようとしている事実、伊勢物語自体が、明らかに別人の和歌を用いてまでその世界を拡げようとしている事実、そして何よりも、勅撰集の本文でさえも伊勢物語の影響によって改変されることがあるという事

実は、人々が如何に伊勢物語の世界を大切にしていたかを物語っている。人々は、伊勢物語を、そして業平を、愛し、慈しみ、そのイメージを次から次へと膨らませていった。そのような人々の愛情、そのような享受の世界こそ、伊勢物語の成長を支えるものであったと思うのである。

伊勢物語の成長過程は、やはり大きな謎に包まれている。しかし、北相公本に補われているわずかな章段から、その一端を垣間見ることができたように思う。

《注1》『伊勢物語の研究（研究篇）』

《注2》《注1》に同じ。

《注3》表の24の和歌である。雅平本にも本来51に存在したものであるが、現存本は詞書のみで和歌を欠いている。北相公本増補の段階で既にこの和歌が欠落していたためにここに補ったのであろう。

《注4》「他本」の部分の和歌を12……と数える。以下同じ。

《注5》「行平朝臣」、掘河本では「在原業平」、承保三年奥書本では「在原業平朝臣」とする。

《注6》『小野小町追跡』（笠間選書）

《注7》ただし、第二句以下、「かさなる山はなけれどもあはぬ日かずを（異本「ひかげも」）こひやわたらん」

《注8》定家の天福本以外は、第二・第三句を、北相公本と同じく「かさなる山はへだてねど」とするものが多い。

《注9》《注1》に同じ。（二五五～二五六頁）

《注10》《注1》に同じ。

《注11》『折口信夫全集』ノート篇、第十三巻伊勢物語。

《底本》

＊北相公本業平集……『私家集大成1』業平Ⅱ

＊伊勢物語……池田亀鑑博士・大津有一博士『伊勢物語に就きての研究』本文篇・補遺篇〈塗籠本・皇太后宮越後本〉・明治書院刊『校註古典叢書』〈上記以外〉

＊後撰集……大阪女子大学『後撰和歌集総索引』〈掘河本〉・小松茂美氏『後撰和歌集校本と研究・校本篇』〈承保三年奥書本〉・未刊国文資料『後撰和歌集（雲州本）と研究』〈雲州本〉・『新編国歌大観』〈上記以外〉

（歌番号は『新編国歌大観』による）

＊古今集・拾遺集・新勅撰集……『新編国歌大観』

（歌番号も同書による）

＊万葉集……『校本万葉集』底本の寛永版本

＊古今和歌六帖……『図書寮叢刊』本文篇

※引用の際、私に濁点を施した。